

私と漱石

Junko Higasa

学校で習った小説で印象に残っているのは、夏目漱石『ころ』と森鷗外『舞姫』である。そして二人の作家は対照的に扱われる。同様に読者の好みも二分する。作家本人の理想的希望は別として、大まかに言ってしまうと鷗外は社会に則する生き方をした人、漱石は社会の中で自分の個性を貫いた人である。

さて、私は何故、夏目漱石のほうをより好んでいるのだろうか。勿論作品内容では鷗外にも共鳴できる。けれどそれ以上に、私は漱石作品の中に、大いに共鳴できる意見を見つけられるばかりでなく、作中人物の性格に自分との類似点を見つけて心情的に入り込めるばかりでなく、漱石自身の人生の出来事に、自分と共通する出来事を見出せるからだ。結局人は自分の人生を重ね合わせられる作家や作品を好むのだろう。

漱石は養子に行った先で養父母の心理を見抜き、大人の期待する応えを示すことが出来た。私の場合も大人の会話を理解し、大人の反応を予測できたところがある。

漱石はガリ勉を嫌い、スポーツに明け暮れた。あるとき病気のために試験を受けられず追試を頼みに行ったが断られた。その時「自分は成績が悪いから信用がないのだ」と考え、心を入れ替えて勉強するようになった。主点は違うが、屋外活動が好きな私の場合、数人で共同作業をしていたある放課後、意見の食い違いから激しい言い争いになった。そしてそれを発見して驚いた先生が我々の中に割って入った。ところが先生は周囲の事を考えて意見を主張した我々側でなく、成績が良く皆から「意地悪な人」として嫌われている一人の子の意見を真っ先に真剣に聞き、我々の話は聞かずに結局その主張が通った。その時「私たちは成績が悪いから信用されないんだね」と皆でため息をついた。私はその経験から、残り少ない中学生活での自己改変は捨てて、高校へ入ってから勉強に身を入れてクラス中の3位までをキープし続けた。ただ本物の知識を積み重ねた漱石と違って、私の場合は点数至上主義的なところがあった。

また漱石は胃酸過多の癩癩持ちで、鏡子夫人に穴八幡宮の蟲封じのお札を張られそこなったが、私の場合は幼少の頃の話である。あるとき周りの大人が「この子は癩が強いから蟲封じをしたほうがよい」と話し合っていた。そのうち伯父が「よく利く」という情報を得たといって、はるばる遠くまでお札をもらいに行った。あまり自覚はなかったが、大人たちが「やっぱり利くね」といっていたので封じられたのだろう。そして19歳の時、急性胃炎を起こしたのをきっかけに20代は悲惨なものであった。蟲封じも有効期限が切れたとみえて、私の癩癩はひどく、漱石同様、後に「あの時は怖かった」と家族に言われた。漱石は熱した蒟蒻を腹に乗せて胃を温めるという非科学的な治療を受けたが、私の場合は酸を調和するためにアルカリ食品である梅干を食べるということをやった。その後自分で「水を飲んで酸を薄める」方法にたどり着いてから、滅多に薬を飲むことがなくなった。胃を温めることは最も重要である。

また子供の頃、漱石は東洋の画の中に安らぎを発見して、そのロマンティック面を維持しつつも現実的である。私は西洋の絵本の画に安らぎを発見して、厭世的ではあるが現実的である。漱石は日本画を描くが、私は油彩画を描く。詩も音楽も好きだ。

こんなことから私は夏目漱石とその作品に惹かれるのだろうと思う。(2013.12.15)